ツンデレ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ツンデレ

【Ｎコード】
Ｎ９６４８Ｃ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
可愛い娘がいると評判のぬいぐるみ店に友人と共に行った上條聡。ところがその店員は無愛想極まりなくそのうえ彼に。いのうえ義成先生のヒメコロという漫画をヒントにしました。

第一章

ツンデレ

都内のあるぬいぐるみ店。ここに一人の少女がいた。

「すっごい小柄でさ」

「髪は茶髪だってね」

周りでは評判になっている。小柄で茶色の髪と大きな黒い目の女の子だ。名前を高橋絵梨奈といいいつも丈の長い青と白の服を着ている。

「可愛いんだ」

「一度見てみるといいぜ」

「ぬいぐるみ店かあ」

クラスメイト達の評判を聞いてふと興味を持った男の子がいた。名前は上條聡、黒い髪と切れ長の日本風の顔立ちの少年だ。背はすらりとしていて高い。何処か中性的なもののある奇麗な男の子だ。

「そんなのあったんだ、この辺りに」

「この前できたんだよ」

クラスメイト達は彼にそう説明する。

「この前な。もう結構評判になってるぜ」

「女の子達の間で？」

「いや、俺達の間でもな」

「結構な」

彼等は笑って聡に言う。

「その娘のおかげでな」

「ふうん、そんなにか」

何か話を聞けば聞く程興味が出て来た。自分でも妙な程に。

「じゃあ僕も。行ってみようかな」

「御前も行くのかよ」

「うん」

こくりと頷いてクラスメイト達に答える。
「何かその娘を見てみたくなったし」
「そうか」
「けれど気をつけろよ」
「気を!?」
その言葉は今一つ意味がわからなかった。いぶかしむ顔になって彼等に尋ねた。
「それってどういうことなの?」
「あの娘結構愛想悪いんだ」
クラスメイトの祐樹と逸郎はそう彼等に説明する。
「結構な。最低限のサービスはしてるけれど」
「愛想悪いんだ」
そう言われて何かあまり行きたくもなくなった。けれど興味がそれに勝った。
「それでどうするんだ?」
「行くか?店に」
「うん」
二人に対してこくりと頷いた。
「そんなに評判なら」
「よし、そうこなくっちゃな」
「じゃあ放課後な」
「うん」
二人のクラスメイトの言葉に頷く。こうして聡はその高橋絵梨奈という可愛いが無愛想という娘に会いにぬいぐるみの店に向かうのであった。

第二章

店の外観はぬいぐるみショップに相応しく可愛らしい感じであった。ショーウィンドーには熊や兎のぬいぐるみが置かれカーテンはピンクだった。そういったものが赤い店に実によく似合っていた。

「ここだぜ」

「ここなんだ」

聡は結城と逸郎に応えて述べた。

「前に一回通ったかな」

「そりゃ学校に近いしな」

「一回か二回はな。うちの学校の生徒だと」

二人は彼に応えて言う。

「誰だって通ってるだろう」

「そうだよね。けれど中は」

「入ったことがないのか」

「うん。何かそれで結構楽しみ」

聡は店の外を見ながら言う。店のあちこちを見回している。

「外は可愛いね」

「中はもっといいぜ」

祐樹が彼に答えた。

「じゃあ入るぜ」

「うん」

こうして聡は店に入った。店の中も至るところにぬいぐるみが置かれそれが赤い内装の店に実によく合っている。完全に少女趣味の店の内装でオルゴールの音楽が聞こえてくる。店の入り口にあるカウンターにその少女がいた。

「いらっしゃい」

いきなりつっけんどんな挨拶が出た。

「冷やかしお断りよ」

「おいおい、いきなりかよ」
そのつっけんどんな言葉を聞いた逸郎が苦笑いをして言う。その後ろには葉と時計がある。そうしたところもやはり少女的であった。
「俺達お客さんなんだけれど」
「お客さんならお客さんらしくしてね」
絵梨奈は冷たく彼に言葉を返した。見れば顔はかなり可愛いのに実に表情がない。まるで人形のようである。冷たい人形だ。
「それが礼儀でしょ」
「まあそうだけれど」
「わかったなら何か買って」
流れるようにして言った。
「どれでもいいから」
「選んでくれないのかよ」
「だって他人の好みなんてわからないし」
あくまで無愛想だ。話に聞いた通りだった。
「自分で選んでもらうのが一番なのよ」
「そういうものかね」
「そういうもの」
そう二人に述べる。
「わかったら選んで。好きなのをね」
「わかったよ。じゃあ選ぶか」
「ああ」
祐樹と逸郎は互いに言葉を交あわせてからぬいぐるみに目を向けた。その時に隣で彼等のやり取りをじっと見ていた聡に声をかけた。
「御前も何か選べよ」
「お金持ってきてるんだろ?」
「う、うん」
二人の言葉に応えて頷く。噂以上に無愛想な彼女に結構引いていたがそれでも彼等の言葉に応えた。その時絵梨奈の目に彼が入った。
「あらっ」

「！？」
彼の姿を見ると急に顔が変わった。それまでの白い顔が赤くなったのだ。
「貴方は」
「！？僕？」
「貴方何しに来たのよ」
先程にも増して無愛想な言葉だった。無愛想を通り越して険すらある。
「何しにって」
「うちのもの買いに来たのよね」
聡に尋ねてきた。
「そうなの？どうなの？」
「そうだけれど」
聡はその険のある言葉に答えた。何故彼女の態度が急に険のあるものになったのかわからず内心かなり戸惑いながら。
「駄目かな」
「うちの店はお客選ぶわよ」
絵梨奈はまた言った。
「素人さんには遠慮願いたいんだけれど」
「そうなんだ」
「そうだったか？」
「はじめて聞いたよな」
祐樹と逸郎は絵梨奈の滅茶苦茶な言葉を聞いてヒソヒソと話をはじめた。そんなことではとても営業なぞできはしないからだ。
「そんな言葉」
「何言ってるんだかって感じだよな」
「けれど。今日は特別よ」
絵梨奈は彼等の言葉をよそに言う。カウンターから立ち上がり聡の側まで来た。聡はそれを見て余計に戸惑うのであった。
「特別！？」

「感謝しなさい」
いきなり聡に言う。
「私が選んであげるから」
「おい、何かおかしいよな」
「ああ」
二人は絵梨奈の変貌を見て囁き合う。
「急に様子がな」
「何かあるな、絶対」
「そうね」
絵梨奈は二人のそんな話をよそに聡の顔を見る。それからまた言った。

第三章

「貴方にはこれなんてどうかしら」
「これ？」
「そうこれ」
出してきたのはアライグマのぬいぐるみだった。白い大きなものである。
「これなんてどう？」
「そうだね。それじゃあ」
「安くしておくから」
「えっ、安くって」
「特別サービスよ」
何故か口を波線にして聡に言う。その様子もまた実におかしなものであった。今までの彼女の態度とは全然違うものであった。
「特別ね。だから感謝するのよ」
「わかったよ。それじゃあ」
「あとこれも」
ハムスターの小さなぬいぐるみを出してきた。
「これはサービス。あげるわ」
「あげるって」
「断ったら許さないから」
こうまで言う。裕樹と逸郎はそんな彼女を見て余計に言うのだった。
「ひょっとしてこれって」
「だよなあ」
「はい、わかったらさっさと買うのよ」
絵梨奈はまた聡に言った。ぬいぐるみを押し付けるようにして渡しながら。
「いいわね。五割引にしておくから」

「五割！？」
「また随分と」
「だから特別サービスだって言ってるでしょ」
絵梨奈はずっと言っていた二人に対して述べる。
「勘違いしないの。いいわね」
「わかったよ。けれどなあ」
「だよなあ」
そんな彼女をよそにまた話をする。
「あいつは気付いてるかな」
「普通は気付くだろ」
二人はまた言い合う。
「どう見たってな」
「素直じゃねえよな」
「いい、何なら七割にしてあげるけれど」
「七割！？」
「そうよ。特別サービスにさらにプラスよ」
こうも言ってきたのだった。
「出血大サービス。これでどう？」
「マジだな」
「絶対な」
ここまで見てわからない方がおかしいだろう。少なくともこの二人にははっきりわかった。わかり過ぎて恥ずかしい程である。
「いいわね」
「五割でいいよ」
聡はこう絵梨奈に返した。
「そんなのは」
「あら、謙虚ね」
「かえって怖いっての」
「七割って何なんだよ」
また二人は絵梨奈に聞こえないようにして言い合う。

「幾ら何でも安過ぎだろ」
「随分と滅茶をするな」
「五割でいいのね、本当に」
「うん」
聡は素っ気無く答える。気付いていないように。
「わかったわ。じゃあこれサービス」
「サービス？」
「そうよ、これね」
ハムスターのぬいぐるみをもう一つ付け加えてきた。しかもトッピングまで凝っている。何処までも徹底していたのだった。やけに赤とピンクのやけに可愛らしいトッピングであった。如何にも恋人に贈るかのようなトッピングである。
「どうぞ」
「はい」
ぬっとした感じで突き出されたそのぬいぐるみ達を受け取る。これだけを見たら素っ気無いように見えるがそれまでがそれまでだった。
「どうぞ」
「有り難う」
お金を払う。その時何故か絵梨奈は自分から手を差し出してお金を受け取るのだった。その時手と手が触れ合うと絵梨奈の顔が赤くなった。
「あっ」
「御免」
「謝らなくていいわよ」
彼女はキッとした顔で言葉を返す。
「こんなことで」
「そうなの」
「そうよ。じゃあ買ったわよね」
赤らめさせた顔のままで彼に言う。

「これでいいわよね。じゃあ終わったのなら」
「帰れってこと？」
「少しなら次に買う品物見ていいわよ」
こう来た。それを見て裕樹と逸郎はまた言い合うのだった。
「ここまで露骨なのってねえよな」
「ねえって」
そうヒソヒソと話をする。
「やり過ぎだろ」
「だよな」
「ほら、見たいのなら見なさい」
絵梨奈は二人の言葉を耳に入れずにまた聡に言う。
「好きなだけ見ていいから」
「あれっ、さっき少しだけならって言ってなかったっけ」
「事情が変わったのよ」
実に奇妙な返答であった。だが実際に彼女にとっては事情が変わったのである。少なくとも彼女個人にとってはそうなのである。

第四章

「だから。いいわよ」
「それじゃあ」
「俺達はどうする？」
「さあ」
その横で二人はまた話をする。
「何かお邪魔虫みたいだけれど」
「それでも別にいていいんじゃないか？」
「そうかなあ」
「まあここで大人しくしていようぜ」
「そうするか」
そんな話をしていた。二人は完全に話の蚊帳の外になっており主役は聡と絵梨奈であった。もっとも気付いているのは絵梨奈だけであるが。
「これがね」
「うん」
半強制的に品物を見せられている聡だがその彼のところに絵梨奈が来て説明をする。そっと側に寄って彼の顔をじっと見上げている。品物は半分見ていない。
「値段も安くていいのよ。お買い得でしょ」
「そうだね。何か」
「あとこれ」
説明を続ける。
「これもいいの。兎は好き」
「うん、好き」
「よかった。それじゃあね」
話を続ける。完全に絵梨奈のペースでありそのまま進む。聡は彼女に言われるがまま店の中のものを見回っている。二人はその横で

休んでいた。
二時間程度店の中のものを見せられた後で店を出た。聡は買ったものを手に持ちながら何かぼんやりとした顔をしていた。祐樹と逸郎はその彼に声をかける。
「なあ」
「何？」
「どう思う？」
二人はそう彼に問うた。
「どう思うって？」
「だから。あの店の娘のことだよ」
「何か変わった娘だね」
二人の問いに対して聡の返答は実に的を外したものであった。あまりにも的を外していてわざとではないかとさえ思える程である。
「どうにもこうにも」
「御前、マジだよな」
「冗談じゃないよな」
「冗談！？」
二人のその言葉にキョトンとした顔を見せてきた。
「何が？」
「マジかよ」
「気付いていないっていうのかよ」
「だから何がだよ」
聡はそのキョトンとした顔のままで二人に言うのだった。
「変わった娘じゃない。それだけじゃ？」
「だからさ。よく見ろって」
「そうだよ」
二人は聡のそんな態度に呆れながらも言う。夕暮れの道は赤い太陽の光に照らされどうにも鈍い感じがする。影が長く尾を引いていた。
「よくな」

「わかるからさ」
「じゃあもう一回行ってみようかな」
二人に言われてふと言うのだった。
「それじゃあ」
「まあそうしたらいいさ」
「そうだな」
二人は彼の今の言葉に頷いて述べた。
「けれどあれだぞ」
「あれ!?何が?」
「何が起きてもな」
「驚くんじゃないぞ」
二人はそう忠告めいた言葉を出すのだった。
「いいな」
「わかったな」
「言葉の意味がよくわからないんだけれど」
彼は首を傾げてこう言葉を返した。二人がどうしてそんなことを言うのかわかりかねていた。これも無理のないことであった。
「どういうことなの?」
「だからな。御前本当に気付いていないのか」
「あれに」
「悪いけれど何が何だか」
答えは相変わらずであった。二人は聡のどうしようもない鈍感さに内心でこれまでにない深い溜息をついた。しかし心の中なので彼にはわからない。
「わかるさ」
「多分な。今度でな」
「今度って次にお店に行った時?」
「そうだよ」
「落ち着いて対処しろよ」
「よくわからないけれどわかったよ」

こうした時にありがちな返答だった。聡は何が何なのかわからない顔を見せたままであった。これが二人のそれとは全然違っていた。
「じゃあ今度だよね」
「ああ」
「頑張れよ」
「うん」
二人のその言葉に頷く。
「それじゃあ次に」
「ただしな。今度は俺達は行かないからな」
「それはわかってくれよ」
「何で？」
二人の言葉にキョトンとした顔を見せる。
「三人で行けばいいじゃない」
「用事ができるんだよ」
「そういうことだ」
二人はつっけんどんな言葉をぶしつけな顔で返した。その顔を見ると不機嫌なように見えるがどうもそうではないようである。
「わかったな。じゃあ一人で行けよ」
「わかったよ。それじゃあ」
何が何なのかわからないまま二人に頷く。そうして暫く経ってから本当に一人で店に向かった。実は二人はそれを遠くから見ていたのだった。
「どうなるかな」
「さてな」
彼等は離れた場所で聡が店に入るのを見ながら話をしていた。喫茶店でアイスティーを飲みながらだが紅茶はそっちのけであった。

第五章

「普通に考えたら成功するだろうがな」
「あいつじゃなきゃな」
そんな話をしながら紅茶のストローをいじりながら話をする。見れば紅茶は減っておらず氷が溶けていくだけであった。
「絶対に上手くいくんだが」
「あの鈍感さじゃなあ」
二人は困り果てた顔で言い合う。
「何とかならねえのかよ」
「ならねえんじゃねえの？」
こう言葉を返す。
「あれだと」
「やれやれだぜ」
「全くだ」
またしても溜息を出す。今度は実際に出す。
「どうなることやら」
「見守っておくか」
そんなことを言い合いながら聡と絵梨奈を見守るのだった。二人が見ているその前で聡は店に入る。店に入ると鈴の音が可愛らしく鳴った。すると絵梨奈はそれだけで顔を勢いよくあげたのだった。まるで知っていたかのように。
「来たのね、やっと」
「やっとって？」
「連絡が・・・・・何でもないわ」
カウンターに座ったまま聡から顔を背けて言う。何故か白い顔が少し赤くなっている。
「何でもないから。来ないと思ってたわよ」
「そうなんだ」

彼は何もわからずそう言葉を返す。
「何でかな」
「私の勘よ。けれど外れたみたいね」
顔を背けたまままた言う。
「それで。今日は何の用なの？」
「また買いに来たんだけれど」
目を少ししばたかせた。やはりここでもまだわかっていない。
「駄目かな」
「いいわよ。じゃあ何を買うの？」
「ええと。そうだなあ」
この前見て目をつけていたぬいぐるみに目をやる。大きな黒い鹿のぬいぐるみだ。それを買おうとそちらに動くとすぐに絵梨奈が出て来た。
「これなのね」
「うん、そうだけれど」
自分の側にやって来た絵梨奈にそう答える。
「駄目かな」
「いいわ」
じっと聡の顔を見ながら答える。
「ただし。定価通りよ」
「そうなんだ。今日は」
「当たり前よ。この前は特別サービスだったから。けれど」
ここで顔が微妙に変わってきた。目が少しカマボコ型になって口を波線にさせる。何かを我慢しているような顔を聡に見せてきたのだ。
「あげたいものがあるの」
「あげたいもの？僕に？」
「そうよ、これ」
そう言って何かを差し出してきた。
「受け取りなさい。断る権利はないから」

「!?これを?」
見ればそれはテーマパークへのチケットだった。聡はそれを見て目を丸くさせた。
「そうと。受け取ってね」
「う、うん」
受け取りながら答える。ここでやっとわかったのだった。
「あの、それじゃあ」
「違うわよ」
また彼から顔を背けて言うのだった。
「ただチケットが余ったから。それだけなのよ」
「そうなんだ」
「そうよ。それでまた言うことがあるわ」
顔を背けたまま顔を赤らめさせて言葉を続ける。恥ずかしがっているのがわかる。
「あのね、また店に来てくれるのよね」
「うん」
絵梨奈の気持ちをやっと知ったうえでの言葉だった。
「僕でよかったら」
「そうよ、別に来なくてもいいけれど」
そうは言っても心は別なのはもうわかることだった。だがその口調は変わらない。
「いいのよ。それでも」
「来るよ」
彼はまた言う。
「会いにね。それでいいよね」
「勝手にしなさい」
そう言葉を返すのだった。しかしこれで二人の仲は決まったのだった。
聡は一人で店を出た。しかしその手には大きなぬいぐるみを幾つも持っていてそのうえ頬には紅い唇の後があった。

少し照れ臭そうな顔をしている。二人もそれに気付いた。
「よお」
「何かあったのかよ」
「ちょっとね」
その照れ臭そうな顔に笑みを交えて応える。
「告白されたよ」
「へえ」
「やったじゃねえかよ」
二人はそれはもうわかっていたがそれでも応えた。
「それであれか？今度デートでもか？」
「そうなんだ」
そう二人に答える。
「ちょっとね。今度の休みに」
「当然行くんだよな」
「断ったら許さないって言われたよ」
絵梨奈も強引に話を進めたのだ。やはり聡と一緒にいたいからなのだ。
「だから」
「そうか。まあ頑張れよ」
「応援しているからな」
「けれど。わからなかったよ」
彼は困った顔で二人に言うのだった。
「わからなかった？」
「何がだよ」
「だからさ。僕のことが好きだったなんて」
その困った顔で述べる。やはり気付いていなかったのだ。

第六章

「言われないと。何か凄く無愛想で刺々しかったし」
「やっぱりなあ」
「そうなるか」
二人はそれを聞いても驚かなかった。当然の成り行きだと思ったのだ。
「御前鈍感過ぎる」
「鈍感！？」
「そうだよ」
「あんまりにも酷いぞ、それは」
二人はまた彼に言う。予想していたが今度は呆れたものも入った。
「あれで気付かないのはな」
「ちょっとな」
「ちょっとって」
聡は二人の言葉に困った顔になる。彼は二人の言葉に戸惑いを増していた。
「何なんだろう」
「あの娘は最初から御前のことが好きだったんだよ」
「それでも素直に言えなかったんだよ」
「そうだったんだ」
それを言われてはじめてわかった。驚きの顔がさらに大きくなった。
「素直じゃなかっただけだったんだ」
「すぐにわかったよなあ」
「なあ」
二人にはわかっていたのだ。ところが聡はということだったのだ。
「だからなんだ。ああして僕にだけ」
「まあそういうことだ」

「けれどこれからは素直になってくれるだろうさ」
「だといいけれど」
聡はそれには懐疑的だった。実はさっきもそうだったからだ。
「さっきも。何か」
「何か？」
「別にそんなつもりじゃないって言ってキスしてきたし」
「おいおい」
「どうやら筋金入りってわけか」
二人はそれを聞いて今度は笑った。絵梨奈は彼等の予想以上だったのだ。
「それはまた」
「けれど。悪い気はしないだろ」
「まあね」
聡はまた二人に答えた。
「僕が好きなのはわかったから」
「じゃあそれでいいんだよ」
「なあ」
二人は笑顔で言い合う。
「誰も素直に言えるわけじゃないんだ」
「素直に言えなくてもな。心は別だったりするんだよ」
「そうか。そうだね」
聡は穏やかな笑顔になって頷く。そうして絵梨奈の心を受け止めたのだった。
それから二人の交際がはじまった。やはり絵梨奈は相変わらずだった。
「はい、これ」
テーマパークでのデート中だった。急に彼に四角い袋に包んだ箱を差し出してきた。
「これ。何？」
「余りものよ」

目をカマボコにさせて言うのだった。
「昨日の夜の。余ったからあげる」
「あの、これって」
「受け取らないと許さないから」
また素直でない言葉を出してきた。
「いいわね」
「うん。じゃあ」
「ここで食べましょ」
こうも言う。
「ベンチに腰掛けてね。いいわね」
「わかったよ。それじゃあ」
「ええ」
二人はすぐ側のベンチに座る。聡はすぐに袋からその四角い箱を取り出した。それは何とお弁当だった。
中はサンドイッチだ。それとチキンナゲット。驚いたことに手作りである。
「これってさ。あの」
「だから余りものよ」
聡から視線を逸らして言う。すぐ隣に寄り添うように座っているが視線は逸らしているのだ。そうした態度もどうにも素直でないものだった。
「食べていいから」
「うん」
その言葉に頷いてからサンドイッチを手に取り口に入れる。すると。
「あっ」
美味しいのだ。しかもかなり新鮮だ。とても昨夜の残りものなぞではないのがわかる。
それを絵梨奈に言おうとする。ところが彼女が先を制してきた。
「美味しい？」

「う、うん」
「お母さんが作ってくれたのよ」
さっきとは全然違う言葉だった。
「品物のお金出してくれて切るのとか作るの実際に横で見てくれえ。それで」
「それってつまり絵梨奈ちゃんが」
「教えてくれたのはお母さん」
あくまでそう主張する。
「私はいただけ。いいわね」
「そうなんだ」
「けれど。嬉しいわ」
今度は視線を聡とは正反対の方にやってぽつりと言った。
「食べてくれて」
「だって。折角作ってもらったんだし」
聡もそう答える。
「それだとね。やっぱり」
「食べてくれるのね」
「うん。それでよかったらさ」
ここで彼は言った。
「また。作ってよね」
「え、ええ」
その言葉を言われると顔を真っ赤にさせてきた。まるでさくらんぼの様に。
「お母さんに頼んでおくわ」
「御願いね。お母さんに」
「仕方ないわ。頼んであげる」
照れ臭そうに言う。けれど二人共悪い気はしなかった。口には出さなくとも心は伝わっていたからだ。もうそれで充分だった。

ツンデレ　　完

2007・9・7

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9648c/

ツンデレ

2010年10月8日15時34分発行